[redacted]

平成27年度授業づくり拠点校（中学校国語）実践事例

[redacted]

Ⅰ　公開授業指導案

第１学年　国語科学習指導案

[redacted]

１　教材名　「月夜の浜辺」（中原中也）

２　学習のとらえ方

（１）生徒観

生徒は４月に「風の五線譜」という詩を教材に、反復法や擬人法、対句などの表現技法について学習している。また、それらの表現技法の効果をグループで群読し、声の重ね方を工夫したり、男女の声の違いを活かしたりすることを通して、詩に込められた作者の思いを表現することに楽しく取り組んだ。さらに、「詩の心－発見の喜び」という教材では３編の詩を読み、詩に使われた言葉や様々な表現技法が作者の心情を表していることを鑑賞文を通して学習している。

生徒は「月夜の浜辺」も、何度も音読することで言葉の響きや表現の工夫に親しみ、情景を想起しようとするだろう。しかし、月夜の晩に波打ち際に落ちていたボタンを拾う「僕」の心情や詩全体の雰囲気については、言葉にして表現することが難しい生徒がいるかもしれない。

これは、直接的な心情表現や動作、態度の表現から「心情をとらえる」ことはできても、様々な表現技法や情景描写などの間接的な心情表現から「心情をとらえる」ことには苦手意識をもっているためである。また、「何となく感じる」ことができても「どうしてそう思うの？」と問われると、感じたことを表現を根拠に自分の言葉で説明することに戸惑う生徒も多いと考えられる。

（２）教材観

本教材「月夜の浜辺」は、山口県出身の中原中也の詩である。月夜の晩に拾ったボタンに心を惹きつけられ、どうしても捨てることのできない「僕」の思いが、反復の多用により強く印象づけられる作品である。月に照らされた静かな浜辺を想像させられるだけでなく、綴られる言葉はどこかもの悲しく、そこに描かれる「僕」の孤独や寂しさを感じ取ることができるなど、描写に注意し、詩の世界をじっくり読み味わうことができる教材である。

また、一連と三連、二連と四連、「月夜の晩に」などの反復表現が、「なぜだか」分からないけれどボタンに惹きつけられる「僕」の思いを強めていき、「どうしてそれが捨てられようか？」という反語表現で結ばれる。繰り返し音読することで、「僕」がボタンに惹きつけられる過程を味わうことができる。

さらに、この詩を反復表現に注目して何度も音読していると、ボタンを捨てることができないという「僕」の思いだけではなく、ボタンを何度も見つめる「僕」の姿や経過していく時間にまで思いを巡らせることができる。さらに、七音の繰り返しを中心としたリズムから、寄せては返す波を想起することもできるだろう。一年生にとって、最初は難解な印象を与えるこの詩も、読み味わうほどに心を惹きつけられる作品であると考える。

（３）指導観

詩の中の言葉から情景や心情を想起し、詩のもつ雰囲気を読み味わうことは、散文とは異なる「表現」と出会う機会となる。他の表現とは置き換えることができない「詩の言葉」と出会わせるために、指導にあたっては以下の点に留意して進めたい。生徒に難しさを感じさせない発問、答えが閉塞的にならない発問を工夫する。（例えば、「作者の寂しさをどの表現から感じるか」と問えば難しくなる。「反復表現があることでどんな気持ちが伝わってくるか」と問えば、「捨てたくない気持ち」と答えは閉塞的になるだろう。）

本時は、「役立てようと思ったわけでもない」ボタンを捨てられない「僕」について、生徒の感じ方の根拠を交流させる時間とする。その際、「忍びず」「袂」「抛れず」などのなじみのない語句については、あらかじめ文脈上の意味を共有し、情景について想起するための条件を整える。その上で「僕」の行為に着目させ、自分の感じ方の根拠について語らせたい。これはもの悲しく美しい情感を編み出す要素を抽出することにつながる。「忍びず」「指先に沁み、心に沁みた」などの表現や「月夜の晩に、ボタンが一つ　波打際に、落ちてゐた。」「それを拾つて、役立てようと」のような反復表現、「どうしてそれが、捨てられようか？」の反語、七音の繰り返しなどの要素が作品を構築していることを交流をとおして実感できると考える。

感じ方の根拠についてワークシートに記入させ、多様なものの見方、感じ方に触れさせ、読みを深めさせたい。また、今後、中原中也の他の作品も紹介し、多読の機会をもちたいと考えている。

３　単元の目標

・何度も音読することで七音の繰り返しのリズムや反復の効果を味わい、情景を想起することができる。

・「僕」の行為の根拠となる表現を抽出することを通して、作者の心情に迫り、読みを深めることができる。

４　本時案

（１）主眼

表現に注目して、作者の心情に迫り、読みを深めることができる。

（２）準備　ワークシート

（３）学習の展開

学習活動・学習内容	指導上の留意点
①本時の学習内容を確かめる	・本時のめあてを提示する。
【本時のめあて】表現に注目して詩を読み深めよう	
②範読を聞きながら情景をイメージする。	
③情景を思い浮かべながら音読する。	・後追い読みの後、一斉読みをさせて、繰り返し音読できるようにさせる。
④詩全体の雰囲気を確認すると共に、いくつかの語句について意味を確認する。	・静寂さや「僕」の孤独感をとらえさせたい。「忍びず」「袂」「沁みる」などの語句の意味を押さえる。
⑤自分ならボタンを拾うか拾わないか、理由も含めて発表する。	・自分から「僕」に返らせることで、「僕」はボタンを捨てられないであろうことを押さえる。
「僕」がボタンを捨てられない証拠を詩の中から見つけよう。	
⑥課題を意識して音読する。	・「捨てられない」根拠を詩のどこから感じるかを問うことで、ボタンに惹かれる「僕」の思いに迫らせる。

⑦ワークシートに自分の考えを記入した後、グループでお互いの意見を交換する。	・自分の意見と友達の意見は色を変えて記入させる。 ・詩全体で、ボタンを捨てることのできない思いが綴られ、反復を多用することでその思いが強められていることを押さえる。
拾っただけのボタンがどうして捨てられないのか、想像してみよう。	
⑧ワークシートに自分の考えを書く。	・「僕」の背景にあることなどを想像することで、孤独感に迫れるようにする。
⑨本時の学習のまとめと振り返りをする。	・学習の振り返りシートに記入させる。

Ⅱ　研究協議の概要と考察

１　研究協議の概要

（１）良かった点

・丁寧な音読と、語句の意味を共有することで、生徒の思考のスタートラインがそろえられていた。
・教師の範読の声や表情が温かい雰囲気を作っていたので、読み味わう活動に入りやすかった。
・生徒の発言、言葉を大切にしていた。
・表現から証拠を探そうという発問が取り組みやすいものであった。
・興味を引く課題で、表現と向き合うことができていた。
・中学１年生に中原中也の詩は難解なものだと思うが、正面から取り組ませようとしていた。
・個人で思考する時間がしっかり確保されていて良かった。
・グループでの話合いで、友達の意見を色を変えて書かせたところが良かった。
・少人数での話合いの中で、安心して意見を言うことができていた。

（２）課題と改善点

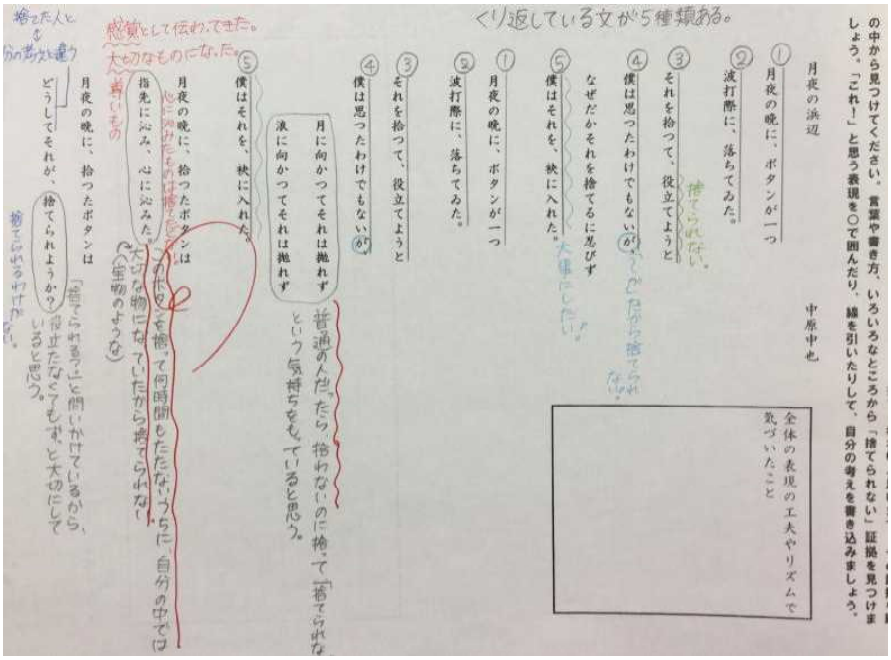
・グループでの話合いの時に、自分の言葉で伝え合うことができていない。ワークシートを写し合っているグループもあったので、もっとグループワークの訓練が必要である。
・「僕」の心情の根拠となる表現技法について、授業の中でしっかり触れるべきである。特に、初めて出てくる反語表現については、押さえるべきであった。間違ったとらえ方をしていた生徒がいた。

・普通なら拾わないであろうボタンを「拾った理由」を考えてから「捨てられない理由」を考えると意見が出やすかったのではないか。
・「証拠を探そう」という抽象的な問いであったため、文章の抜き出しをするのか、作者の心情を想像するのか分かりにくかった。
・『この詩を読んで、「捨てられないだろうなあ」と感じるのはなぜだろう』という問いにしても良かったのではないか。
・「詩を読み深めよう」というめあてはゴールの見えにくいめあてであった。
・主発問は板書した方が分かりやすい。
・生徒が第一印象で「悲しげ」「暗い」と言っていたので、詩のどこからそう思うのかという流れにすれば良かった。

２　授業後の考察

中学１年生の生徒に中原中也の詩とどう向かい合わせるか、というのが今回の授業での一番の課題であった。いくつかの学級で授業をする中で、表現の工夫に注目することに重点を置いたり、印象に残る表現にこだわってみたりと、様々なアプローチでこの詩と向かい合わせてみた。しかし、これらの手法では思いはあってもうまく表現しきれなかったり、詩の世界観をつかみきれずに、詩に入り込めないまま立ち止まってしまったりという状況になった。

公開授業当日は「ボタンを捨てられない証拠を詩の中から探す」という課題で、自分自身の感じ方の根拠を生徒同士で交流させることをねらいとした。すると、少人数のグループの中では様々な意見交換がなされていた。こちらが思った以上に豊かな心で詩の表現を受け止め、感じ取っていたことがワークシートの上には書き留められている。



普段から発言の少ないある生徒が「ボタンが一つ落ちてゐた」という表現を、「捨てられない」根拠として挙げていた。何とも思っていなければ「ボタンが落ちてゐた」と書くはずだと考えたようだ。「一つ」という何気ない表現に思いを寄せた発言である。残念ながら、このつぶやきを全体の場に広げることができなかった。授業者と生徒との間で、もっと言葉のキャッチボールができれば、生徒の詩の世界観が深まり、手応えのある授業になったのではないかと考える。

そのためには、常日頃から発言のしやすい雰囲気づくりをしていくこと、生徒の意見をしっかりと受け止め、的確に返していくことなど、丁寧な積み重ねが大事である。

Ⅲ　取組の成果

本校では全校体制で以下のことを中心に生徒の「活用力を高める」授業づくりに取り組んでいる。

・学習規律の確立
・授業導入段階での「めあて」の提示
・課題解決型授業の実践
・言語活動を中心にした授業展開
・少人数グループによる、課題解決への取組
・生徒同士の話合い活動による、共に学び合い深め合う授業づくり
・生徒による授業評価の実施
・ユニット型研修による校内での授業研究

「めあて」の提示と授業評価については、全教科においてほぼ定着しており、目的意識をもった主体的な学習と授業改善に大きく役立っている。少人数でのグループ学習も生徒の「話す・聞く力」の向上につながっており、本校１年生の「やまぐち学習支援プログラム」の国語科の結果を見ると、「話す・聞く」設問での正解率が県平均を上回っている。また、他者に考えを伝えるためにワークシートに考えをまとめるなど、「書く」活動を授業の中に多く取り入れることで、「書く」ことを厭わない生徒が増えたように思う。「書く」領域においても、県平均を上回る結果が出ている。日々の取組の積み重ねが、着実に成果に結びついていると言えるだろう。

また、ユニット型研修は異年齢、異教科の教員によるグループで研究授業が行われるため、様々な視点で意見交換がなされ、授業者にとっても参観者にとっても得るところが多い。

今後も引き続き、全校体制で授業改善に取り組み、生徒の確かな学力につなげていきたい。